

図書館職員受験体験記

大学院 文学研究科 臨床人間学専攻 博士前期課程2年

山口 美咲

はじめに

私は今年度（2011年）の国立大学法人等職員採用試験を受験し、国立大学図書館に採用されることとなりました。私が受験した国立大学法人等職員採用試験と県立図書館の採用試験について、試験の概要、私がどのような勉強をして試験に臨んだのか、といった事について書きたいと思います。実際の試験の様子を知るうえでの参考にいただければ幸いです。

国立大学法人等職員採用試験の概要

国立大学法人等職員採用試験とは、国立大学・大学共同利用機関・国立高専・博物館などの独立行政法人の職員採用のための試験です。「図書」という区分がなされている数少ない試験であり、図書館専門の職員になれる可能性があります。

試験は全国を7地区に分けて一斉に実施されるため、受験できるのは1地区のみです。募集数は多くても1地区10人程度、この人数は年によって大きく変動することもあるため、こまめにホームページで確認することをお勧めします。事務・図書・技術の中から1つ分野を選んで受験しなくてはならないため、事務と図書の併願もできません。

1次試験

1次試験は教養試験のみで、内容は事務・図書・技術共通です。問題集が出版されていますので、どのような問題が出題されるのか知ることが出来ます。他にも、一般的な公務員試験の問題集を解いて練習すると良いと思います。あまりひねった問題は出題されない、というのが私の印象です。

この試験に合格すると、図書の専門試験を受

験することになります。1次試験の合格発表が試験の約1か月後、合格発表の週の日曜日に専門試験が行われます。そのため、合否が明らかになる前から準備しておく必要があります。

2次試験

図書館情報学の専門試験が課されます。過去問はホームページから見る事が出来ます。資格課程の授業を復習しておくことが基本ですが、マニアックな問題も出題されるため、教科書も読んでおいたほうがいいでしょう。また、記述問題が出題されるため、重要な用語の説明や似た用語の違いについて、書けるようにしておく必要があります。

専門試験への合否判定はありません。面接を受験した各大学で、面接の結果と専門試験の結果を合わせて、内定が出されます。

面接

面接の方法は大学によってかなり差がありましたが、基本は1対多の個人面接です。多くて3回、私が内定をいただいた大学では、面接は1回でした。大学院生は学部生と比べると、勉強してきたことの内容や身につけた能力について、具体的に聞かれたように思えました。

しかし、最終的には熱意や根性を見込んで内定を出した、といわれました。「図書館で働く」ということについて、自分できちんと考えておく必要があります。

県立図書館採用試験の概要

某県の司書職での採用試験も受験し、1次試験に合格しました。大学図書館から内定が出たので、2次試験は辞退しました。

1 次試験

1 次試験は、教養試験と図書の専門試験です。教養試験は、難易度はそれほど高くなく、ひねった問題もなかった印象です。

専門試験は、図書館に関する基本的な知識を問う問題でした。司書課程の授業で習ったことがきちんと身につけていれば、回答できるものが多かったです。

2 次試験

私は受験しませんでした。1 次試験の合格者には、論文試験・グループディスカッション・個人面接が行われたそうです。

勉強方法

私が司書職採用試験、ひいては公務員試験を受験することを決めたのは、大学院に入ることを決めた時です。なので、1 年生の時にために国立大学法人等職員採用試験を受験してみました。なんとなくの雰囲気がわかって、受験してよかったと思っています。2 年生になって本番の試験の時も、国家Ⅱ種などの他の公務員試験を受けられる限り受験しました。試験慣れするためにも、他の公務員試験を受けることをお勧めします。

本番の試験に向けての勉強を始めたのは、1 年生の1 月からです。公務員試験の内容を知って思ったのは、「大半はSPIと大して変わらない」ということです。私は学部の3 年生の時に就活をしていて、SPIの勉強は一通りしていましたし、さらにSPIの勉強を始めた時に、「中学受験の内容と大して変わらない」と感じていたので、公務員試験の問題に抵抗感はありませんでした。

公務員試験は解き方に慣れることが重要なので、300 題収録されている過去問を使って、1 日にすべての分野から1 題ずつ解く、というペースで進めていきました。自分の苦手な分野がわかってきたら、その分野の参考書を使って詳しく勉強しました。

その他やっておいて良かった事は、論理学概論の授業と推理パズルです。論理学概論は、私が受講したときは学部1・2 年生用の授業でした。論理学の基本的な思考法を身に付けることが出来、論理問題を解く際に役立ちました。推理パズルは、判断推理の問題と同じステップを踏んで解いていくパズルなので、判断推理の問題を解く際に役立ちました。

お勧めしたいのは、新聞の一面の見出しを手帳に写すことです。時事問題は前1 年くらいの世界情勢から出題されます。ニュースに大きく取り上げられたようなことが多いので、この方法である程度の対応ができるはずです。また、新聞を読む習慣がつけば、就職活動全般に役立ちます。

おわりに

簡単ではありますが、試験概要と勉強方法についてまとめました。読んでいただければわかるとおり、私の勉強方法は我流であり、良い結果を保証できるものではありません。本気で図書館司書を目指すのならば、自分にあった勉強方法を見つけるためにも、早めに勉強を始めるほうが良いと思います。

司書職は狭き門ではありますが、決して不可能ではありません。図書館司書を目指す皆さんに、少しでも有益な情報を残せていたら幸いです。

図書館職員受験体験記

文学部 史学地理学科 4年

山上 朋宏

はじめに

私は今年度（2011年）の司書職採用試験を受験し、国立大学法人の図書館に採用されることになりました。ここでは試験に対しての勉強法や受験中に感じたことなどをまとめていきたいと思います。受験する際の参考になれば幸いです。

試験内容

司書職採用試験は公務員試験と同様に一次試験で筆記、二次・三次試験で面接、集団討論、論文試験などが出されるのが基本です。

ただ、筆記の専門試験の内容の違い（図書館情報学の出題の有無）や内田クレペリンなど性格検査を課すケースもあるので、受験案内を必ず確認し、対策を取る必要があると思います。

また、司書職は採用人数が少ないので館種、地域にこだわらず幅広く受験すること、試験慣れするためにも他の公務員試験との併願をお勧めします。

教養試験対策

教養試験は出題科目が多いので対策が大変です。私はサークル活動が忙しく予備校に通う時間がなかったのでLECの通信講座を受けました。テキストの他にもネット上で実際の授業の動画を自分の都合のよい時間に視聴できたのでとても助かりました。

どの科目から取り組むかですが少なくとも数的処理はどの試験でも出題割合が高いので早めに取り組むべきだと思います。少なくとも毎日1題は解くことをお勧めします。

また、予備校の模試などを活用して、実際の試験形式で時間配分や解く順番などを訓練することももちろん大切です。

専門試験対策

司書職採用試験では、専門試験では図書館情報学が出されることがあります。司書課程の授業で学んだ内容を中心に出题されるので授業に対して真剣に取り組むのが大前提です。

私は勉強の成果を確認するため、2年生の時に「情報検索基礎能力試験」、3年生の時に「図書館情報学検定試験」を受験しました。両方ともテキストがあり、図書館情報学の勉強になるだけでなく、前者は履歴書にも書けますので、時間の都合がつく方は受験してみるのもいいかもしれません。

また、図書館関係の雑誌を、たとえ目次だけでも読んでおくと、今の話題がわかり、時事的な問題の対策にもなります。

過去問も自治体や機関によっては国立大学法人のようにネット上で公開している場合もあります。自分が受ける採用試験については必ず調べようにしたほうがいいと思います。

面接試験対策

私はまず、受験する図書館の情報収集を行い研究しました。HPをチェックするだけでなく実際にその図書館に行ってみたり、CiNii、NDL-OPACなどを使い受験先の図書館についての論文を収集したりしました。

また、自分が普段利用している図書館について質問されることがあるのでこちらの研究もしっかりやっておく必要があると思います。同様に、受験する図書館の設置母体への理解も大切です。

実際の面接の練習は後述の勉強会と明治大学の就職キャリアセンターでやってもらいました。自分がしたいことだけでなく、そのことにより、利用者にどのような利益があるか。自分の主張、

仕事で活かせる能力などを裏付けるエピソードをどのように話すかなどに気をつけて練習しました。また、予想される質問にQ&Aを作成して見てもらったりしました。

面接は何よりも場数をこなすことが大切だと思うので是非、人を相手に自分の主張を伝える練習をしてください。

司書職採用試験対策のための勉強会

明治大学では月1回、司書・司書教諭課程室で明大OBの図書館員の方を講師に勉強会が行われています。

図書館情報学についての対策や現場のお話が聞けるだけでなく、面接に対してもアドバイスしていただけるのでとても助かりました。それとともに普段周りにはなかなかいない司書職志望者と会え、お互いに話すことができたことはモチベーションの維持にとどまらずより深く図書館や自分について考えることができたように思います。

また、司書・司書教諭課程室は情報の宝庫です。テキストや図書館関連書籍、受験体験記などもありますので興味のある方は一度行ってみることをお勧めします。

おわりに

司書職は採用人数も少なく、確かに難しいです。私の場合、サークルやゼミなどで司書職を目指す人は皆無でしたので不安もかなりありました。その中で勉強会で同じ志の人たちと出会え、話し合えたことはとても大きなことでした。司書職に限らず、採用の少ない職種に関しては同じ志を持つ仲間が大切だと思います。是非、仲間を見つけてください。

また、司書職の採用の図書館は少ないですが、毎年複数の図書館が募集しており、受験の時期も複数回あります。たとえ最初の試験がだめでもあきらめず、その試験の失敗した点を研究し、改善すること。最後まであきらめず、挑戦し続けることが大切だと感じました。

図書館職員受験記

2008年度卒業生 文学部 日本文学専攻

三 富 清 香

私は在学中に司書資格を取得しましたが、卒業時に民間企業に就職しました。二年間の社会人経験を経て、再度図書館員になるためにほぼ一年間に渡り様々な自治体の採用試験を受けました。その中で私の感じたことをまとめたいと思います。

志望動機について

私はきめこまやかな対人サービスが必要とされ、住民と協働して地域に図書館の根をおろしてゆけるという点から、公共図書館を第一志望としていました。この度、幸運にもA県の図書館員として採用していただけることとなりました。

以下、A県をモデルに試験の概要と各試験の対策法について簡単にまとめてみます。ただし、各自治体によって採用試験の内容は大きく異なります。それによって必要とされる人材の像が分かることもありますので、受験する自治体の試験情報はなるべく事前に集めておくことをおすすめします。

試験内容について

一次試験は筆記試験、二次試験は集団討論と個別面接、小論文試験が課されました。

筆記試験（教養試験及び専門試験）について

教養試験対策は予備校に通いました。映像受講をしたので自分のペースで勉強を続けることが出来ました。教養試験はとにかく範囲が広いです。自然科学系統、特に物理と数学が大の苦手で、6割以上から得点が伸び悩みました。特に数的処理は毎日コツコツと解いていくしかないのですが、もっとはやくから腰をすえて取り掛かればよかった…と悔やまれました。試験自体も

長丁場なので、時間配分を掴むためにも模擬試験は定期的に受けました。自治体によっては春先から試験を実施します。試験の形式に慣れるためにも、少しでも興味を持った自治体の採用試験は一般行政職枠であっても受けてみました。

専門試験対策は、学生時代に使っていたテキストやノートを主に使いました。また、司書資格課程事務室で月に一度行われる勉強会では、現職の司書として勤めていらっしゃる講師の方から様々な助言、指導を賜りました。

館種の異なる図書館の短期アルバイトを複数掛け持ちする、学生時代にお世話になった学校図書館司書の方をお願いして図書館を見学させていただくなど、とにかく図書館業務を実地で覚えていきました。講義で学ぶ内容が、現場ではどのように生かされているのかを知ることによって、理解の深さも変わってくるように思います。学生時代に図書館講習に参加するか、もしくは図書館でアルバイトをしていれば、より深く講義の内容を理解することができたのではないかと思います。

小論文試験について

筆記試験対策で手一杯で、ろくに対策を練られないまま小論文試験に当たりました。二度模擬試験を受けてはいましたが、かなり焦りました。過去の出題内容が自治体のホームページ等で公開されている場合、それに即して実際に時間を計って書いてみました。一度書いたものがある程度時間が経過してから読み直し、添削しました。また、知人や友人をお願いして自分の書いた文章に目を通してもらい、率直に意見を述べてもらいました。自分では気づかなかった誤字や、ちょっとした文章の癖、知識の偏りなどを指摘してもらえたので、本当に助かりました。

また、テーマについて留意しておいた方が良いのは、図書館に関するテーマが出題されるとは限りません。A県の場合は、その自治体の抱える課題について例年出題されていました。

それらの課題について、どのような具体的な取り組みが既に行われているのかをまずは押えておく必要があると思います。

他には、公務員としての職責についてなど広く私見を問うものもありました。

集団討論試験について

これも様々な自治体で課されることの多い試験です。自治体によっては集団討論の比重が大きく、丸一日をかけて集団討論をすることもありました。もしも公務員試験一本に絞られている方でも、一度は民間企業を併願して本命の前に集団討論を経験しておいた方が良いと思います。個別面接とはまた違った緊張感、プレッシャーがあるように感じられました。

気をつけていたことですが、話すことにばかり注力し、相手の話を聞くことをおろそかにしないようにすることを心がけました。また、提示された課題について自分の知っていることだけでなく、そこから何を考えるのかをなるべく具体例を交えて話すようにしました。参加者は自分を含めてですが極度に緊張してしまいがちなので、話す内容よりもむしろ話し方や態度の方を意識した方が良いのかな、とも思いました。

個別面接について

ジョブカフェや本学の就職課、あるいは予備校が提供するサービスをフルに使い、模擬面接を繰り返しました。

民間企業に比べると、質問の内容はオーソドックスです。が、私は社会人経験が既がありましたので、「これから何をしたいのか」だけにとどまらず、「今何ができるのか」という観点からも、自己アピールをするように心がけました。

面接を通して、何故その図書館を志望するのかという志望動機を深く掘り下げておくことが必要だと感じました。実際に志望する図書館に

少なくとも一度は足を運び、自分の目でその図書館の雰囲気を確かめ、その図書館が何を大切にしているのか、また、自分はそれをどのような部分から感じ取ったのかを言語化できるようにしておく面接のときに役に立つと思います。

おわりに

図書館員の採用試験はやはり厳しく、モチベーションを維持することが難しい時期もありました。このまま何年も受験していても、合格しなかったらどうしよう？ と思うと、焦りばかりが募りました。そのような中で実感したことは、何故図書館にこだわるのか、自分なりの理由を見つけることが大切だ、ということです。私の場合は、ろくに何もしないまま、ただただ思い悩んでしまう時期もありましたので、動きながら考えるようにした方が後悔は少ないということも実感しました。

図書館員を専門職として採用する自治体は現在のところ限られています。今までは採用していた自治体も、今後も採用するとは限りません。遠方であっても、図書館員になりたいのであれば、フットワークを軽くして試験をどんどん受けてみるのが大切だと思います。その際、遠方の自治体や図書館に関してはどうしても疎遠になりがちですが、インターネットや文献を調査するだけでなく、なるべく生の情報を手に入れることで、考えが深まることもあると思います。地元の図書館などを利用するときも、その図書館が大切にしているものを、具体的な取り組みから感じ取ること、また、それらを踏まえて自分がその図書館の職員なら、利用者にどのようなサービスを提供したいのかを具体的に考えることも重要だと思いました。

図書館に深く関心を持ち、同じように図書館員を目指すひとは勿論、逆に図書館に全く関心のないひとと、図書館について進んで話をすることも、個人的には大変ためになったように思います。

今後、図書館員を目指される本学の学生諸氏に、本稿がささやかな一助となることを願っています。